

## 平安文芸史の記述に関する研究

著者	大原 仁史
号	22
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	文第270号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/59368">http://hdl.handle.net/10097/59368</a>

# おお はら ひと し 大 原 仁 史

学 位 の 種 類      博 士 (文 学)  
学 位 記 番 号      文 第 270 号  
学位授与年月日      平成23年 3 月 3 日  
学位授与の要件      学位規則第 4 条第 2 項該当

学 位 論 文 題 目      平安文芸史の記述に関する研究

論 文 審 査 委 員      (主査)

教 授 佐 倉 由 泰      教 授 佐 藤 伸 宏  
教 授 佐 藤 弘 夫  
准教授 横 溝      博

## 論 文 内 容 の 要 旨

### 前提となる暫定的問題意識

最初の論点として文芸史記述の有意性の問題がある。平安文芸史の記述に関してはジャンル史、歌壇史を除くと実際に書かれたことが少なく、国民文学史論の衰退以降、近年に至るまで文芸史の理論的研究も多くはなかった。大江匡房「詩境記」(『朝野群載』)のような通覧がなかったわけではないが、基本的に文芸史は近代の知性の産物である。また、民族的自己同一性に言及した国民文学論にはある種の若々しさと偏狭さとがあるが、平安文芸史は理念的には海外の文化を憧憬していたという意味で前後の時代とは区別される文芸史であると考ええる。本研究の理論については H・R・ヤウス『挑発としての文学史』(豊田収訳 岩波書店 昭51・6)に啓発された。本研究はヤウスの論の驥尾に付して始められたことを付記する。

一方で、現代日本における平安文学史研究に関しては以下のようなものがある。「構想」を論じた研究として風巻景次郎『日本文学史の周辺』(塙書房 昭28・7)があるが、具体的論述は古代文学史と時代区分論に多くが費やされた。西郷信綱も『日本古代文学史』(岩波書店 初版昭26・10)を二度改稿し、また西郷信綱著(実際は編著)『日本文学史』(国民図書刊行会 昭27・1)をも著したが、ヤウスと同じく記述よりも歴史的思考に重点を置いていると述べている。また、形成と頹廢とを強調する古代文学史もあるが、平安時代だけからかもしれないが、『源氏物語』の達成に偏向し過ぎた記述というべきであろう。作品論という隘路に対し、文芸史の俯瞰という観点はいまだ十分には検討されていない。

第二の論点はジャンルの交替、様式の対比についてである。土居光知『文学序説』(岩波書店 昭2・2)の指摘するジャンル交替の周期性は日本古代文芸の場合には適用しがたいので、本研究では多元的

なジャンルの歴史的生成・展開を理論的前提としている。また、いわゆる古典主義の様式とロマン主義の様式、あるいはそれを発展させた理念を掲げる岡崎義恵、小西甚一等の、弁証法的展開を想定する一群の文芸史にも与しなかった。

平安文芸史に関しては、むしろ植物的な生長・結実の比喻でその展開を把握した方が『古今和歌集』仮名序などの理念にも適い、文芸史として妥当であると考ええる。その史観の妥当性は本研究第六章「平安文芸史攷」によって判断してもらうほかない。時代ごとに暫定的に設定される史観が統合され、更新されることも考慮する必要があるだろう。それは非完結性を発展につなげることと一体なのである。また、個々の作品論にも留意している。作品の解釈によっては文芸史も大きく刷新される可能性があるからである。

最後の論点は身体的限定という主体の偏在性の擁護についてである。自己の立場を遍在的とみなす、あるいは遍在の可能性を考えるのは明らかに実態にそぐわない。むしろどの個人もそれぞれが偏在的であるからこそ意味を担う。文芸史の立場は対象が個人の範囲を超えているため、すべての領域を視野に収めることの不可能性を常に想定している。しかし、それゆえにこそ全体性への希求と他者への継承の必要性が生じるのである。最初の立脚点をどこに据えるかは大きな問題かもしれないが、そこにとどまらない全体への志向が文芸の学にとって必須となろう。

## 文芸史の理論的考察と平安文芸史の記述

本研究では序章で作家、作品、読者の相関における美的事象として文芸事象の規定を行い、文芸史の研究史、並びに具体的記述のための理論的考察を試みた。ここで述べる文芸史とは文芸事象の規定に基づいたものであり、対象が無限定に近い文学史とは一応区別している。ただし、狭義の美、唯美性を追究するという偏狭な意味ではない。

文芸史については従来から時代区分の問題が喧しく論じられてきたが、その多くは結果として政治経済史的な区分を踏襲してきた。本研究では文芸史の内容に鑑み、時代を平安時代にほぼ限定してではあるが、時代区分の根拠を『方丈記』、『新古今和歌集』といった分岐点となる文芸からの回顧という観点から提示した。

第一章では研究史の考察から歴史的研究の重要性を導き、理論的観点から記述主体の〈変容〉と対象の〈破壊〉という方法を提唱し、諸作品の言語分節の相違を考慮しつつ、文芸史の意義について考察した。受容と影響において読者として、作家あるいは作品に依存する公衆と共通点を有しつつ、文芸史を構築する主体が公衆から区別されるのは、それが記述行為という実践を志向するからに外ならない。受容は検証可能性の有無に左右されないが、文芸史の記述主体は作品解釈からその連関性の構築に至るまでの妥当性の検証を絶えず要請される。認識が一つの所有であるとすれば、記述は言説における伸縮・迂回等の様態によって時間性を本質とする文芸的価値を認識する行為に外ならない。その時、文芸史は作家・作品の権威の下に従属するのでも、テキスト論のように作家・作品を捨象するのでもなく、作家・作品と対等な、独立した学として成立しうるはずである。詩学と異なり文芸史は歴史美学に立脚し、記述されるべきであろう。問いと問いの場は存在一般ではなく、存在者の具体的な有限性、偏在性において存立する。それゆえ文芸に内在しつつ、いまだ言語分節化されていない非分節への到達のあり方において、〈破壊〉が要請される。隠蔽された自明性の内実、歴史的価値を正しく問うことによって実際の記述をもとに知を継承することこそが文芸史の目的である。

第二章は文芸史記述における〈記述〉の文体について論じた。褶曲する文体を文芸史に採用する意義として、解題的説明ではなく、諸文芸間の様相に即しつつ屹立する個々の作品を対象とする〈史〉

の、堆積・断裂・褶曲する様相を記述の凝縮によって表現する可能性を論じた。

第三章では文芸史の記述主体について、第二次世界大戦後の代表的文学史家である西郷信綱に焦点を当て、大戦前後から戦後にかけてのその言説の変容、及び文学史の方法の確立について具体的に究明し、その長所を論じた。文芸史を構築する上で重要となるのが研究主体の問題である。記述主体は歴史社会的・身体的制約を強いられるが、その偏在性こそが対象と研究主体の座標軸を決定し、単なる理論的考察ではなく具体的な文芸史の記述を可能にするのである。すなわち、発展性を秘めているという意味での非完結性を考慮しつつ、作品群の網羅的解題、問題史とは異なる、多旋律的な文芸史を記述するためには〈主体〉の変容による死角の補完が必須であると考ええる。ここではそうした文学史記述を具体的に提示しようとしてきた西郷信綱の〈主体〉の変容を、その方法論上の立場を「己が心を信ずる」という言葉を指標としつつ論じた。

第四章では平安時代を対象とする文学史家が多く依拠した〈散文〉という方法について、文芸史の視座としての近代の散文精神の展望と、批評におけるイロニーと散文精神の相克の問題を探索した。

第五章では歴史学からの文学史把握を、主に戦後文学研究に大きな影響を与えた歴史学者、石母田正の論を通して検証した。具体的論説を掲げ、石母田正によって提起された文学史記述に関わる歴史的な問題を、その論の背景まで含めて再検討した。文芸史の場を単なる抑圧と抗争という構図だけで把握するのではなく、抽象論や裁断批評、イデオロギー論を超えて、より文化と権力機構の実態に即した認識の道程を探究した。

第六章では本研究における諸作品論をふまえての平安文芸史として実際の記述を行った。従来のような解題的、あるいは形成史的な観点ではなく、諸作品の一回的意義、分量的な均整に配慮しつつ、平安文芸史を言説の受容、塑型、内化、傾斜、破壊の様相として記述した。平安文芸は自然の無窮性に対して〈個〉が自己の有限性を感受することにおいて始発する。すなわち集団から離脱した〈個〉において、局面的ではなく、持続する内面的同一性を希求することになる。「平安楽土」の建設とともに、その内外において漢文学で成立した「風光」の美に対する自己の眼差しを見出した時、言語分節によって意味化された〈個〉は、平安京という〈都市〉に限定されつつ、感性の洗練と抑圧という視点から改めてその偏在的内実について省察を要求されることになる。言説を組成する言語分節とその連辞性の変容は言語認識、ひいては文芸を受容する美意識に変化をもたらす。位置、力、方向性、質量を具備する言説において、一要素の変化は一言語系全体に変化をもたらすことさえありうるため、文芸史は言説の断続平衡的かつ多層の様相を分析、記述することを要求される。そこでの主題は主体よりもむしろ言説間の関係における美の生成である。

## 平安文芸論

文芸史を全体とするならば、作品論はそれを根拠づけ、連環をなす部分に該当する。平安文芸史の俯瞰に対する歩測としての作品論を以下の各章では提示する。

第七章では平安時代の時間意識について、平安時代初期の漢詩文と平安時代中・後期の仏教説話文芸に題材をとり、身体と時間という偏在性と変化の中にある不変への憧憬を探究し、平安文芸の精神的基層を考察した。具体的には『法華経』の靈験と不壊の身体を漢詩文と説話文芸を横断しつつ、変化と不変の相克の様相を指摘した。

第八章では『源氏物語』と共通の「いづれの御時にか」を始発とした『伊勢集』に焦点を当て、女性の歌日記と物語との接点を、異本を視野に入れつつ考察した。冒頭表現を起点として、特に「けむ」表現の有無に着目し考察する限り、『伊勢集』における「けむ」表現の推量は、「けり」表現や和歌の集積

に対して語り手からのさらなる遠近を付与するものであった。そして、そこでの視点の遠近法は「うみたてまつりし」等の過去の確固たる体験を含みつつ、歌人の生を連結させ、立体化させる重要な語り口たりえた。集中の屏風歌に使用されている「けむ」表現などもその立体性を証している。そして、そうした表現機構によって形象化される主人公、及び作品の発端は『源氏物語』へと、その素材よりもむしろその思惟の本質において流入していったと論じた。

第九章から第十一章では『枕草子』評価の刷新を企図する。『枕草子』は『源氏物語』評価の反動として内省の不足を理由に長い間おとしめられてきた。本研究では明るさと愉しさを起点としてその文芸史的意義の復権を試みた。自由な「書きつけ」としての『枕草子』は私家集、「打聞き」、「撰集」などへと広がりを見せる。また、従来強調されてきた連想だけではなく対比も強調されており、そこには事典的列举、偶然の思いつきだけではない自覚的な美の構成も見られる。素材の多様性を数量的にのみ把握する素材論的な観点や、それを敷衍した近代の人道主義の観点から『枕草子』の文芸性が時代通念を抜け出していないとする従来の研究を再検討し、主体性に欠けるとして貶められてきた『枕草子』の類聚・随想章段を中心に新たな読み方を試みた。類聚・随想章段の表現に典型的に見られる、生きられる時間での心がはずむ愉しさを、様々な事物と時を「折」として諧和させることで演出する点を重視する必要がある。美意識自体の様相や美的語詞の分類ではなく、むしろ題材がいかなる質のものとして構成され、好意ある主体によってときめくあり方に調和されているのかを考察することが『枕草子』という作品の再評価につながるはずである。その意味で『枕草子』は従来の評価のように没主体的な作品なのではなく、むしろ主体が前面に出る、叙情性あふれた作品として理解できると論じた。

第十二章以降、第二十六章では『源氏物語』の解釈とその文芸史的意義を考究した。第十二章から第十五章までは深沢三千男、藤井貞和等の王権論への批判を行った。＜王権＞という説明概念の曖昧さと益田勝実の提唱する＜王権＞の神秘性という問題提起は史実と異なる。摂関期における帝の後宮での生活、劔璽との関係、及び国政に關与する意識等に焦点を当てると、『源氏物語』に登場する帝、及びそれを補佐する周囲の貴族の立場が現実に対して一定の偏差のあることが理解できる。三代御記や『小右記』、『北山抄』、『春記』の例などを検討し、歴代の帝に関する呼称、摂関最盛期における後宮での帝の生活実態や還御の時刻、御劔璽宮の破損等を参照するならば、王権論の前提としてこれまで定説化されてきた帝の「日知り（太陽の司祭）的神秘的な性格」の残存、その異常性、神聖性という認識、摂関制との関係は再考を要しよう。『源氏物語』と古代天皇制を直結させ、古代幻想的発想の延長に聖別された存在として帝を把握するよりも、むしろ『史記』天官書等の天人相関説、災異説に淵源する天変地異との相関における緊張、多忙というような点にこそ摂関期の帝、また『源氏物語』の帝の特徴を求めねばならない。

「光」の呼称も王権論の根拠とはなりえない。「光君」の全巻にわたる呼称表を作成したが、それによるとその巻における支配的なものに対して上欄にある（より先に登場する）呼称ほど安定したものとみなすことが可能であり、括弧中の数字が示す地の文において支配的な「君」・「殿」・「大臣」・「院」等に対する「光君」・「光源氏」がそうした安定と変化の關係に該当する。「光君」の呼称の特色は呼称成立の關係が時空間的、及び社會關係的に＜離隔＞している点にある。枠組みとして「光君」の物語の内部に「光源氏」・「男」・「男君」・「中将」・「大将」・「殿」等の活躍する多層的な世界が話者の視点との相関において存在する。「光君」の物語枠の内部に枠を活性化させる「光源氏」の物語がより私的・逆説的な語りによって相互浸透的に展開し、人物形象の自己同一性を表現する場面における形象の多層的構造もそこに窺えることをあわせて論じた。

鍵語と説明概念の区別については格別の注意を払った。＜王権の犯し＞という概念を使用するのに

対し、「犯し」と「過ち」、「罪」と「咎」の相違を論じ、「光」にのみこだわることの非、三部構成説があくまで仮説に過ぎないこと等を考慮し、作品を恣意的に分割して論じるような、作品論から大きく逸脱した文化英雄論の非を論じた。その上で物語と史実の相違をふまえ、准太上天皇が従来説明されてきたような意味では王権と直接に関係しないことも呼称等から改めて指摘した。光君の「すき」からなされた「過ち」は、用例からすれば〈王権〉を意図的に侵犯するものではなく、冷泉帝即位も結果として成就したに過ぎないことを論じた。

第十六章では作者論・作品論の旧弊を打破しようとしたテキスト論に一定の理解を示しつつ、同時に「つらきもあはれ」という語句の、文脈を無視した恣意的な引用論の陥穽を論じた。『源氏物語』研究で〈物語取り〉の典型とされる「竹河」巻の一場面を取り上げ、作品内部における〈物語取り〉の認定には同一の作者の類型的表現との差異をより厳密に判別しなければならないと論じた。固有名詞等がない場合には同一作品内で〈取る〉という作者の意図がうかがえるか否かの判別はしばしば困難を伴う。社会・生活形態の類似による表現の類似の問題を除外した準拠論、引用論は牽強付会に陥りやすいことを提言した。

第十七章以降、第二十章では人物形象論とそれ単独での限界、また人物形象論の文芸史的可能性について論じた。人物形象を常識的人格で裁断することの非を物語の登場人物の死の場面を通して指摘し、喪失を介在させた人物形象の連続性の文芸史的意義について言及している

『源氏物語』「葵」巻の葵上の死去から紫上との新枕に至る経緯については不自然であるとする見解があるが、『源氏物語』や『栄花物語』等を参照するならばそれは物語の不整合とは言えず、光君の意識の底流に絶えずあった藤壺宮・紫上への情愛が葵上の死去後もたびたび浮上しつつ、やがて表層の動向が一段落することによって、厭離と執着の間で情愛の基底があらわになってゆく自然な経緯を描いていると論じた。

非日常的・夢想的な情愛と日常的・現実的な情愛とを内面的に結合する契機が「慰め」を希求する行為である。『源氏物語』の桐壺帝、光君、夕霧、薫、匂宮等の人々は夢想的・非日常的な情愛の結末である対象喪失を受けて、現実的・日常的な情愛へと向かう。その時、「慰め」を希求する行為に焦点を当てるのは二つの情愛の間に心理的な断絶を来さないための物語史上における新たな方法であったからである。「慰め」を希求する行為は、それ以前の物語との対比から明らかなように、生の悲惨さからの回避を試みる慰戯としての消極的価値の基底に、喪失感との緊張関係から生じる強靱な生の衝動が内在しており、逼塞からの新たな生の展開を可能にしている。死、別離等による「慰めがたし」と表現されていた対象喪失の文芸史上での克服の方途が『源氏物語』における「慰め」を希求する行為である。その結果をうけ「慰め」を得る代償として過去の集積の重圧を担う人々の姿が『源氏物語』で描かれる。それは、生の断片において表現を行う物語にはありえない複雑な物語の構造であり、物語に生の連続と憂愁とを同時に付与するものであったと論じた。

栄華の象徴的存在としての六条院の秩序を維持してゆくのは中年期の光君の外面的な若さであった。秩序の維持を象徴する若さに対し、老年の意識がそれを崩そうとするところに光君の存在意識がある。外面を流れる栄華の時間に対し、内面的時間は光君の衰微を示している。光君と玉鬘の二人の関係が示す様相は、自在な包摂における束縛感と流離意識である。その束縛が別な束縛に移行する時、玉鬘をめぐる物語は新たな展開を示すことになる。

『源氏物語』「若菜上・下」巻において女三宮は責任をすべて受け入れざるをえないが、女三宮に特徴的な形容である「おいらか」の内実はそうした規範に対する忍従に自己を委ねる態度をひきうける生き方である。自己に関係する他者の責任をも含め、自己の責任をひきうけ、忍従する、その皇女が特徴的

に持つ規範の遵守の姿勢に女三宮の美質は見出せる。女三宮は一つの空白のような可能態なのである。柏木はそうした点において死に至るまで女三宮を誤解し続け、自己の中の女三宮像しか見てはいなかった。光君のみならず、柏木の場合もやはり女三宮の本質とは関係のない虚像と向かいあっていただけでなかったと論じた。

第二十一章以降、第二十六章では『源氏物語』を中心とした平安文芸の精神的基層について論じた。精神的基層については三谷栄一の提唱する在来信仰に対して老荘思想、神仏習合思想等との関連を平安時代の文芸に求め、神秘思想に傾斜する王権論を時代思潮の側から訂正を迫った。六条院創設の理念と浄土教は密接に関連しており、「極楽」をその美しさの点において模倣しつつ、それが「生ける」という現世の制約の中で成立したものとして六条院を理解すべきであろう。六条院の四季の町の配列は右回りに春夏秋冬の順序になっていると整理できるが、「春夏秋冬」の順序は『源氏物語』の時代における通念であることが『莊子』、『礼記』等の用例から理解できる。一方で人間界の調和でさえも人間界の限界として把握するのが『往生要集』や『無量寿経』であるが、『往生要集』と『莊子』、『無量寿経』は密接な関連があり、それらでも仏の国における四季は「春夏秋冬」と表現されている。また「右繞」という点でも『往生要集』の通念と同じである。これらの『源氏物語』への影響を指摘するのは、六条院が老荘思想を摂取した道教と浸透し合って、理念的背景となっていると考えるからである。六条院は「春夏秋冬」が「右旋」によって配列されており、何ら不調和や歪みはない。しかし、その後の玉鬘の夏の町への参入や女三宮の春の町への降嫁によって、その体系が次第に別様のものになってゆく。現世の栄華に対する「常なき世」・「定めなき世」の意識の中で光君と六条院の人間関係は押し流され、やがて苦の様相を帯びること、それが現世に存在することの限界であると論じた。

「須磨」「明石」巻での光君の動向に関わる明石入道、その現世への執着心と仏道への傾斜、出家の意図について「を、ただ」等の屈折する文体の問題と併せて論じた。また、明石入道の「この世」と「後の世」という対比の思惟の背景にある「和光同塵」に関する表現を追い、典拠ではなく時代的思潮として人物形象との関係を論じた。

個人的精神的志向についても男性から女性への物質的・精神的顧慮としての「後見」、苦悩への共感としての「思ひやり」、絶望における詠嘆としての「あはれ」などの、主として情愛についての表現を網羅的に調査することで『源氏物語』の人物関係の構造とその反復を文芸的展開の中で追究した。

『源氏物語』の初期における「宿世」からの超脱を試みる「慰め」には他者との心情の懸隔があった。対象喪失において高揚する情愛の展開は日常性への移行にともなって頹落へと陥るしかない。しかし、その頹落は文芸史的には私的内面における慰藉の希求から「後見」の態度へと社会的関係において積極的方向に移行し、そこに新たな情愛の再生・拡大の方途を見いだすことができる。すなわち「後見」は慰藉の自己中心性を薄め、慰藉の限界の表れとしての精神的逼塞を超脱する方向へと展開してゆく。それは対象喪失による孤独から連帯への志向であり、真正な情愛の持続的顕在化への過渡的意義を担っている。主人公達は対象喪失による孤独の苦悩に耐え、逆にそれを契機とする積極的意識的状況把握を基底とした、情愛と執着心の均衡関係を得る。その上で他者理解としての「後見」による関係を築き、新たな構造の物語を形成してゆく。しかし、その位相においては自己と他者の関係は精神的顧慮・物質的配慮の域に留まり、それゆえに他者に対し開かれた情愛とその情愛の苦悩を解決すべき求道心が照射される過程で中心的意義を喪失してゆくと論じた。

「思ふ」という思惟の現実性は光君と六条御息所との関係において語り手によって確認されている。「思ふも物を」という言葉に示される内向的思惟自体とその発散を示す「やる」という語に表現される慰撫行為との断絶の結合の関係における緊張として「思ひやり」は成立している。事物及び自己の意味

を再構成し、時空を架橋するために共感性を中心とした罪障行為・規範逸脱行為のない志向性が主体の規範の自由領域を見出す自由性回復を図ることで主体を慰撫するのが「思ひやり」の機能である。その場合、規範性からの逸脱ではなく、規範性自体に内在する不確定性を自由領域として広がる志向性は他の規範との契合、対立等の中でその特異さを表す。他者への志向性は「思ひやり、後見たりし」の用例のように利他的心情を基底としているがゆえに罪障感を伴わない。そうした自己充実と拡張の二重化された隠喩による意味の延長上に他者への推察・共感・想像がある。主体における共感的思惟の発見は、他者の態度決定の自由を保障するとともに、他者理解のもとに主体の他者及び規範に対する自由性を拡張しうる可能性を内包する、言語による関係の網目を分節化すると論じた。

「あはれ」が『源氏物語』の基底的存在感覚の地平であることは「あはれなる事多くて、よろづに、おぼしなぐさまる」、「あはれに、おもひ後見」、「あはれに思しやる」、「物のみあはれにて、御行ひ、しめやかにし給ひ」等によって提示される。「慰めがた」い喪失によって生ずる「うしろめた」い孤独な人間の「思ひやる方な」い苦悩が「なき者」という絶望に至る時、死と関係する「あはれ」の場において「思ひやり」、「後見」で「慰め」ようとする営為の反復がある。死を媒介とする生の連続と憂愁、その中での栄華を支持する調和、その基底にある欠如意識を伴う情愛、それらの彼方には現世の超脱としての「道心」に傾斜しつつも、委託するものもなく生きなずむ悲傷の存在意識があることを論じた。

仏教的無常観からの超脱の問題において登場人物は無常を超えようとして「行ひ」、「勤め」に向かう。遁世することへの迷いはあるが、もはや存在を抱きとれるものはない。そうした求道的精神の果ての孤高の姿勢に『源氏物語』の人物形象という観点での到達点があると論じた。

第二十七章では八代集という和歌史の中で具体的に命令表現の和歌の価値認識について新古今歌人である式子内親王の和歌を取り上げ、表現論的研究を試みた。和歌史の上でいかに命令表現歌が詠まれるようになり、『新古今和歌集』で頂点に達したかを主に計量的観点から論じた。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、平安文芸史を記述することに関して、その方法論と実践を提示した考究である。平安文芸史を記述することの意義と方法を根源的に論じ、これを記述する場における論点、留意点を明示するとともに、その方法意識、問題意識にもとづいて、個別の作品について、適正な解釈を行うことを意図して、用語、表現展開、人物形象、基底をなす精神等を周到に考察し、文芸史的意義を明らかにしている。論文全体は、序章を含めて二十八章から構成されている。

序章から第五章までの六章では、文芸史記述の対象、方法、文体、主体についての理論的考察を行っており、考究上の論点、留意点を明示しつつ、歴史社会的、身体的な制約による自らの偏在性、有限性を認識した記述主体が、作家、作品と対等な関係において文芸史を記述することの意義を論じている。「平安文芸史攷」と題する第六章は、理論の提示から平安文芸史の考究へと移行する結節点をなす章であり、自然の無窮性に対して〈個〉が自己の有限性を感受するところに平安文芸史の始発を認め、以後の変転する様相を巨視的に展望している。第七章以降は、具体的な作品の記述に即しての各論であり、第七章では、平安文芸の担い手の時間意識を論じ、第八章では、『伊勢集』第二類本の冒頭表現の文学史的意義を考察し、第九章から第十一章の三章では、『枕草子』に明朗な叙情性があふれていることを的確に指摘し、その文芸史的意義を明らかにしている。第十二章から第二十六章までの十五章では、『源氏物語』を対象にして、その記述の解釈を提示し、文芸史的意義を考察しているが、第十二章から第十



五章までの四章は、光君の呼称のあり方や「過ち」の意味等に着目して、いわゆる王権論の問題点を指摘しつつ、光君の栄華の物語を王権の問題とかかわらせずに考究すべきことを論じている。第十六章では、『源氏物語』内部での表現引用としての〈物語取り〉の認定を問題にして、これと類型的表現とを厳密に判別すべきことを論じ、第十七章から第二十章までの四章では、登場人物の喪失と情愛、喪失と「慰め」や、光君と玉鬘との関係、女三宮の人物像といった問題を考察して、人物形象論の限界と可能性を提示し、第二十一章から第二十六章までの六章では、六条院創設の理念、仏道と愛執、「孤独」と「後見」、苦悩と「思ひやり」、「あはれ」、無常と「行ひ」という問題を詳細に論じて、平安文芸を支える精神的基層を明らかにしている。最終章の第二十七章では、式子内親王の詠歌と『新古今和歌集』における命令表現を含む入集歌の多さを考察し、そこに平安文芸の一つの帰趨を見出している。

以上のように、理論的な自覚と作品論の実践とが深く有機的に結びついた本論文の考究は、きわめて根源的で、独自性、妥当性が高く、貴重であり、斯学の発展に寄与するところ大なるものがある。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。